

片岡良一

新人生派

新
人
生
派

若い世代の革新的意欲の凝集的な表現としてあらわれ
た新感覚派が、そういう出発を持ったものとしてはむし
ろ意外な、官能的享樂や形式主義の小味な技術主義に傾
いてしまった時、同じ陣営の中から、そうした風潮に反
発して起ったものに新人生派があつた。此派は、中村武
羅夫を上置きとして、新潮社系と目される数人の作家を
集めただけの、小さな集団に過ぎなかつたが、上記の通
り、新感覚派末期の芸術主義や官能的享樂が一代の風潮

となろうとした時、その名称の示す通りの人生派的な道義性の追求を目標として出発したところに、その派としての存在理由を持ったのであった。のみならず、新感覺派が、旧来の写実主義的方法への訣別を意図し、とにかくにも新しい主知主義への道を目ざして、そのための摸索につかれていたのであったのに対して、此派の人々は、云わば伝習的なリアリズムと心境主義の方法とを踏襲して、それによって何等か健康な人間生活の内部的基準を探求し出そうとしつつけていたところに、前者とははっきり区別さるべき特質を示していたのである。その

意味で、それは、自然主義末期以来の文学伝統の、新感覺派を契機として起つた主知主義への氣運に対する、反撃とも見られるような運動であつたことになるのである。小さな流派ではあつたけれども、そう思えば此派の存在にもかなり重大な意味は見出されるわけなのである。

けれども、此派の守りつづけようとしたような方法をしてしては、彼等の所期するような何もかも発見し得ない——或は発見し得てもこれをどうすることも出来ない——自然主義以来の歴史によつて既に明瞭にされ

ていたのであった。菊池寛が新しい材料の払底を嘆じた
り、直木三十五が「日の下に何の新しきものあらんや」
などという文章を書いたりしていたほど人生のすみずみ
まで探求しつくされて、然もそこに何等の新しい見通し
も見出されなかった、それ故の新現実主義末期以来の文
壇的低迷であることが通念化されていたからこそ、新感
覚派などでも、そういう伝習的な写実主義を乗り越えよう
として、意外な逸脱に傾いてしまったのであった。そう
いう新感覚派に反撥してそういう方法を固執しようとし
た新人生派は、だから当時の転換期的な気運にさえ盲目

な、保守的反動の流派だったということになる。彼等に如何によき意志と熱意とがあるうとも、その旧めかしい探求方法の前に、新しく輝かしい道のひらけようはずもなかつたし、当然此派の派としての影もあまり濃いものにはなり得なかつたのである。わずかに新人嘉村礒多を登場させたことだけが、此派としての重要な見どころと云えるくらいのものであつたかも知れないと思う。

嘉村の代表的な作品としては、「業苦」「崖の下」「途上」「神前結婚」などがあげられる。それらの作品によつて伝えられる此の作者の世界は、かつての自然主義及

びそれ以後の多くの作家たちがなめつくして来た苦悩を、新しく若々しい熱意と誠実さを以て、執拗に掘じくりかえして見せたようなものであった。その執拗さにはむしろ強調的とも感じられるほどのひたむきさがあり、そうしたひたむきさを以て追求された本能的人間の醜さや汚さには、時に面をそむけずにはいられなくなるほどのものさえ含まれていた。それは自然主義的人間探求としての底をついて見せたようなものであったし、ここに示された徹底性に此の作者の作品の一つの価値が見出されたのであった。が、そうした醜さや汚さに対して、

作者は例えば昔の岩野泡鳴などのように、一種の誇示的なものを感じているのではなかった。どころか、それを不可避の人間の実体として、その上にでんと腰を下ろそうとしているのでもなかった。それらをすべて醜さであり汚さであると判断しながら、そこからの脱却や超克の不可能さを感じて、それ故の苦悩や自虐に落ちこんでいたのであった。そこに作者の極めて常識的な健康さがあったと同時に、やはりあるがままの人間を絶対と観じようとするのでない、人間を建直されねばならぬものだとする時代の意識が、おぼろげながらからみつかさかされてい

たのであることが、知られるわけであろう。その意味では作者もやはり此の時代の子であつたことになるのである。それ故にこそ彼が新人生派の作家などとも称ばれることになつていたのである。

が、そういう作者の道は、此の作者がしていたような主情的方法による諦観だけによつては、とうてい達せらるべくもないものであることが、上記の通り既に証明済みであつたのである。そうした方法によるかわりに、もう少し科学的分析的な方法を以てすれば、此の作者のぶつかつていた苦悶が、近代的自由人としての心意の不熟さ

と、それ故に残されている封建的意念からの束縛という、二元の相剋に由来するものであると同時に、当時の社会機構の必然から彼等の追いこまれていた極度の経済的窮乏に由来するものであることが、比較的容易に判断されるのである。そうしてそれがわかれば、そうした苦悩からの脱却の方途も必しも見当のつけられぬものではなくなるはずなのだが、それを、上記のような作者の方法を以てしては、そのように分析的に把握することが出来ぬのみならず、そうした方法に據るといふ態度そのものの中に、そうした矛盾を内包する自分を全的に肯定する気

もちが、実は既に含まれてしまっていることになるのである。結果として、一方に於ては醜いと感じ汚いと感じずるものを、より根柢的などころでは不可避の人間の実相として肯定しなければならぬことになる、その自己矛盾を清算しきれなかったばかりに、此の作者は彼自身のぶつかっている問題を、結局どうにもならぬ自分の人間的分裂と観じ、それを揚棄し得ぬところから来る苦悩を宿命的に脊負わされた「業」と感ずるよりほか仕方がなくなつたのである。そうしてまたそういう見方で行けば、それは事実不熟な近代日本に生育したわれわれすべての

脊負っていた「業」のようなものであつたに相違ないのであるだけに、そうした「業苦」と凄じい格闘をつづけたあげく、その揚棄し得ぬままにいわゆる自虐の泥沼にのたうっていた此の作者の世界は、強く陰惨な迫力を以てわれわれに迫らずにはいないのである。自然主義文学運動挫折の後、同じような場面に追いこまれた人々の間に、いわゆる「狂気か破滅か」の苦悩がつづいたことは、多くの文学史家の伝えるところだが、それから二十年を距てた嘉村の苦悩は、つまりはそれと同じい「無解決の苦悩」だったのである。自然主義以来の方法が方法

であつたため、同じ苦悩がこうして二十年後にもそのまま持越されたのであり、その持越された問題に体当りして泥まみれになつた嘉村の主體的誠実さには、もとより深い敬意がささげられるけれども、そう云つても、そうした方法を以てしてはそこに行くよりほか仕方のないことが、既に一応ははっきりと把握されていたが故に、一方にはプロレタリアリズムの提唱もあらわれ、他方には新感覚派さえ伝統リズムへの批判に出発していたのであつた時代の現象としてみれば、そこに幾らか笑止な感じも伴わぬではなかつた。殊に彼が、そうした苦

悩をしよせんは揚棄し得ぬものとあきらめて、そうした苦悩と業とを脊負った人間が、そうした苦悩や業に引廻されるままに、云わば輪廻の道をとぼとぼと歩いているより仕方のない、そういう淋しい人間の生活なのだと言ひ観して、その淋しさを蕭条たる松風の音に象徴する——これは彼として殊にすぐれた作品と云われる「途上」の結末なのだが、とにかくそういう境地への愛著にせめてもの落着き場所を見出して行こうとしたかたちなどには、やはり日本的自然主義の結論との相似を思わせるものがあると同時に、例えば「六の宮の姫君」を書いた芥

川龍之介が、此のあわれな女の最期に、

「何も、——何も見えませぬ、暗い中に風ばかり、——冷たい風ばかり吹いて参りまする」。

と云わせて、そうしてそれを、「極楽も地獄も知らぬ、腑甲斐ない女」の悲しみだと註釈したのなどを、自然に連想させるものがあるのではないかと思う。のみならず、此の作者は、その苦悩の故に、しじゅう仏教などを身近に引きつけていた。にもかかわらず、そこに救いを見出して来るかわりに、こうして最後まで人為的に構築された芸術的境地などに愛着したのでありながら、そう

して捨てきれぬ主体的な生き方や力への自覚は終に持ち得るに到らなかつた、その点での自己吟味の粗漏さにも——と云つていけなければ科学的な探求力の不十分さにも、大きな問題は残されていたのだと思う。新感覺派にさえ反撥して彼等のいわゆる静的リアリズムに終始した此の作者にとって、人生や社会に対する主体的な生き方など極めて縁遠いものであつたことは、むしろ当然であつたろうけれども、然しそうした点への自覚のない「人生派」などというものは、考えてみればどうやら一種のナンセンスめいたものにさえなるのではないかと思う。

しよせん此の作者は、そうした主体意識の稀薄さから、伝習的な自然主義末期以来のリアリズムの道を、も一度行き着くところまで行き着かせて見せたという以上のことは出来なかつた作家であつたのであり、彼の行き着いたところから更に一步の新しい展開をたどるためには、その方法なり態度なりに一つの大きな飛躍が必要なのであつた。が、それは彼には終に果されぬことであつたし、そういう彼を唯一の光つた存在とした新人生派が、此の時代としての積極的な役割を果した派流とはもとより云えなかつたのである。だから嘉村の特殊な誠実さやそれ

故の作品の卓越は当時もしばしば云われて居りながら、此派の派としての展開はあり得ず、かえって間もなく派としての存在が見失われてしまうようなことになったのであった。

尤も、それは単に新人生派のみのことではなく、昭和三・四・五年頃以後のプロレタリア文学隆盛期を迎えるに及んでは、新感覚派一般も形式主義も、皆それぞれの立場をすてて、伝統市民文学系統の人々が結成した反左翼主義の集団新興芸術派の中に、一せいに流れこんで行ったのであった。新人生派も要するにそれと同じ軌道を行

たどったものであったのに過ぎなかつたけれども、それにしても此派が、「人生派」としての旗幟を容易にぼやけさせて、いつの間にか「芸術派」に転換してしまったのみならず、中村武羅夫の如き、いかにも其派の旗持ちらしく、「誰だ花園を荒すものは」などという文章を書くようになってしまったのであるだけに、新人生派の歴史が、あまりにもはかな過ぎたような感じを、そそられずにはいनाかったのである。それは結局新感覚派的揺蕩の中にあった文壇に、伝統リアリズムの線を持続させたという以上の、あまり積極的なものは示し得なかつた流派

だったと、結論されるよりほか仕方がないものとして、その歴史を終わったのだと思う。ただそこに、此の文学一般の関心が主として外の世界の問題に傾こうとしていた時代に、あくまでも人間主体の問題への関心に終始しようとしたところに、近代文学伝統の正系らしいものがあったことだけは、注意されねばなるまいと思うが――。

日本文学電子図書館

新人生派

著 者：片岡良一

制作者：宮澤一郎

底 本：「近代派文学の輪廓」
白楊社

昭和25年11月1日発行

日本文学電子図書館